

ミニ・フィールドワーク 森林と林業を考える

7月26日(月)「森林と林業を考える」ミニ・フィールドワークを行いました。大学の授業で「森林と林業」取り上げ、それを研究会でレポートしたことがきっかけで、かねて気になっていた森林組合に行ってお話を聞く、ことが実現したのです。

午前中は、檜原村の田中林業、田中惣次さんを訪ね、お話を聞くとともに、田中さんの森を少し歩きました。田中さんは、日本でも大変めずらしい自伐林業家(自分の山の木を伐り出す)です。自伐林業では、自分の植えた木を伐り出すことはまずありません。植えてから材になる木になるまで最低スギで50年、ヒノキで80年と言われますから、伐り出せるのは、お祖父さん、お父さんの代のもの。それでも昭和30年代からの拡大造林期に植えたモノが、今伐期となって山にはたくさん植わっている。もちろん、その間、木材価格が下落したり、手入れがされず荒れた森も多いのだけれど…

でも、下草刈り、枝打ち、雪害対策、間伐などの管理をしながら、今は「必要な分だけ伐り出して売ること、何とかやっつけていける。これも、拡大造林のおかげ」と田中さん。

田中さんの森は針葉樹500ha、広葉樹500ha、広葉樹から薪も年間1万把出荷しています。

一方、午後、訪ねた東京都森林組合は、東京の森林所有者の協同組合。東京都もその面積の36%が森林。国有林はほとんどなく、島嶼部以外で51000haある民有林に、組合員が2500人ということですから、一人あたりの森林所有面積はわずか、さらに、その高齢化、世代交代などによって、森林の境界の不明確化などもおこっていると。

要は、そうした森林所有者にかわり、森林にかかわるさまざまな事業(森林循環促進事業=花粉対策、多摩産材の供給、森林再生事業=荒廃したスギ・ヒノキ林を間伐し、森林の機能を再生させる…)などを受注し、森林の整備・管理に関わる仕事をしながら、木材利益を組合員に還元しているとお話でした。

田中さん(田中林業という会社)も森林組合も、見た目は、同じように森林、林業にかかわる仕事

(下草刈り、枝打ち、間伐、主伐=木材生産…)をしています。やはり森に対するスタンスには、大きな違いがあるようでした(が、まだそのあたりがよく飲み込めていない)。



プロが
も
り
森林の仕事
をしています。

東京都森林組合トップページ

